

# 論 文

## 産業における官僚制の成立

——マルクスの所論を中心として——

三 戸 公

- 一 はしがき
- 二 産業における官僚制の成立
  - 1 協業、分業、機械制大工業
  - 2 その疎外的側面
- 三 資本による疎外と官僚制による疎外
- 四 産業における官僚制免罪の過程
  - 1 『ヘーゲル国法論批判』
  - 2 『経済学哲学手稿』
  - 3 『ドイチュェ・イデオロギー』
  - 4 『哲学の貧困』
  - 5 『経済学批判要綱』
  - 6 『直接的生産過程の諸結果』
- 五 むすび

産業における官僚制の成立

まこと、ウェーバーのいうように、「普遍的な官僚制化という味気ない事態」のすさまじい進行のただ中に、現代はある。

デモクラシーが叫ばれるなかで、あるいはそれが謳歌せられるなかで、政治においても、生産においても、医療においても、教育においても、娯楽においても、人間生活のあらゆる分野がつきつぎに巨大なピラミッド型の組織 $\parallel$ 官僚制的組織によって遂行せられ、諸個人はその組織の内と外とにおいて支配せられざるをえないビュロークラシー状況の進化拡大のただ中にある。個人は組織のなかで自己を特殊化し、畸形化することによってのみ自己の存在理由をもち、組織の外部の個人としてはそれぞれの生活分野を巨大な組織にからめとられ、抑圧せられ、支配せられる。

それは、レーヴィットがウェーバーを解説して言うように、呪術・魔法の世界から現実が解き放たれ、夢からさめた《合理化》が、合法的・合理的な秩序・施設・組織・制度を形成展開することの当然の運命として非合理を生み育てつつある過程である、<sup>(1)</sup>ということもできよう。

現代組織の典型は、産業における組織である。産業における経営、企業の経営こそ現代社会の諸組織の代表的典型的な経営である。目的行為を遂行するに、最少の犠牲で最大の効果をあげるべくつくりあげられた行為体、組織体の模範として、現代企業経営はある。そして、それは官僚制的な組織体をなし、官僚制的に経営体をなしている。ではこの現代社会における典型的・代表的な組織体たる産業における組織 $\parallel$ 企業組織、すなわち産業における官僚制組織は、いかにして形成せられてきたのであろうか。

産業における官僚制の成立の論理をもっとも明確につかみ出し呈示したものは、他ならぬマルクスであるといつて差支えない。マルクスによって、企業が巨大なビューロークラティックな組織体として形成せられざるをえなかった論理が、比類なく見事に画かれている。もちろん、マルクスは、産業における官僚制の成立を、それ自体として画いたのではない。彼の画いた資本の論理が、産業における官僚制の成立の論理を内包したのであった。すなわち、マルクスの資本の理論は、極言すれば、商品および貨幣の論理に還元できるものである。それは、『資本の一般的範式』としてG—W—G'の形態が呈示せられていることをみただけでも明らかであろう。このとき、貨幣としての貨幣を資本としての貨幣に転化せしめるものは、言うまでもなく特殊な商品、その消費が同時に新たな価値を生み出すという特殊な使用価値をもつ商品たる労働力商品の存在であり、労働力商品の貨幣流通への内包である。労働力商品の消費即価値増殖の過程を、マルクスは絶対的剰余価値の生産と相対的剰余価値の生産の二範疇にわけて説明しているが、この後者において産業における官僚制の内実が語られることになる。

官僚制組織は、目的合理的行為にあらわれ、そこに成立する。資本制生産は利潤追求的生産であり、労働時間の延長・労働の強度化・労働の生産性の向上を阻止なきかぎりどこまでも押し進める生産である。労働時間の延長と労働強化は、それを阻止せしめるいくつかの要因があるが、労働の生産性の向上にはなく、それは無制限的に展開せられることになる。労働の生産性の向上、すなわちよりすくない労働でもってより大きな生産物をえようとする方法を、マルクスは相対的剰余価値の生産と名づける。それは資本の内在的衝動であつて、またそれを絶えまなく追求しないかぎり、別の言い方をすればその方法において他資本に後れをとるかぎり、その資本は敗退し、存続不可能となり、内在的にも、外圧的にも、相対的剰余価値生産に邁進せざるをえない。より少ない労働でより大なる生産をあげるた

めには、もろもろの生産に関する諸法則の適用、もろもろの生産の技術の採用がなされなければならない。そこには、生産をめぐる諸法則が貫徹せられ、人はその支配下にあらねばならぬ。そこに、産業において、合法的支配が成立する基礎があり、合法的支配の最も純粹なタイプとしての官僚制的支配が成立せざるをえないのである。

『資本論』における「相対的剰余価値の生産」の篇を、産業における官僚制の成立という視点から、以下把握してゆく。そして、そこで浮び上って来る問題、すなわち資本による疎外と官僚制による疎外との峻別をめぐる問題に関して、若干の検討を試みてみたい。

(1) Karl Löwith, Max Weber und Karl Marx, 1932. 柴田・脇・安藤訳『ヴェーバーとマルクス』未来社第二章参照

(2) 『資本論』からの引用は、長谷部訳・河出版による

## 二

## 1

労働の生産性の向上、相対的剰余価値の生産の具体的内容として論ぜられているものが、協業、マニユファクチュア、機械制大工業である。

同じ指揮のもとに多数の人間が協働することなしには、官僚制組織は成立しえないが、マルクスが協業を論ずるにあたって最初に語る言葉は次の一節である。「より多数の労働者が、同時に同じ空間で（または同じ労働場所であってもよい）同じ種類の商品の生産のために同じ資本家の指揮のもとで働らくということは、歴史的にも概念的にも資本家的生産の出発点をなす。」彼は、協業こそ歴史的にも概念的にも資本制生産の出発点をなすといっているわけだ

が、それについて、特に説明を加えてはいない。したがって、それがどれほどの含意のものか確定はできない。注目に値する一節ではある。

協業において、まづとらえられていることは、労働者の量的増大であり、つづいて平均的労働力の発現である。平均的労働力の発現、すなわち比較的多数の労働者が集められるや個々の労働者の個別的差異が相殺され消滅し、社会的平均的労働力が発現するという事実をマルクスは資本制生産にとって重視しているが、それは同時に、官僚制組織にとっても重視されてよい。

協業が労働の生産性向上に資する論拠として、生産手段の節約（建物・原料・諸用具等々が共同的に消費されることによる）、集団力の創造、個人的な力能の上昇（接触による競争心や興奮によって）、各人が全体労働の部分労働化することによる作業速度の上昇、（これは単純協業の段階でリレー式運搬等において既に現われる）、一定の期間に成果をあげねば全体が無駄になる時期の解決、労働空間の拡大、これらはいずれも結合労働による独自の生産力であり、人間の個人的諸制限を脱した種族能力の発展である。そして、協業は、多かれすくなかれ、指揮労働を不可欠とする。オーケストラにおける指揮者の必要の例を示した有名な節はここにある。

協業の一特殊形態としての分業は、次のような諸点にもとづき、労働の生産性は向上する。分業により、各労働者は部分労働者の実質をうけとる。部分労働は全体労働より単純であり、それが部分労働者によって担われることにより各部分労働は習熟発展せしめられる。場所の移動・用具のとりかえの減少、あるいは消滅、道具の特殊化と発展。

このような部分労働者と道具とを要素とした協業の特殊形態としての分業の構造は、もともと時間的継起の生産の段階的諸過程を空間的並列に転化した、労働過程の社会的組織にほかならない。ここに単純協業をこえた労働の連続

性、一貫性、規則正しさ、秩序、労働強度が生み出されることになる。そして、労働過程の段階的諸部分労働の質的編制とともに、各部分労働間の量的均衡の必要性は量的な規則、比例性をもった編制を生む。この機構において、部分労働者は特殊の労働者として自己の器官の一面的特殊の發揮によって部分労働者・特殊労働者として自己を完成する。一面的機能の習慣は、部分労働者をしてその機能を自然的に確実に作用する器官に転化させ、全体機構の関連は部分労働者を強制して、機械の一部分のように規則正しさをもって作用させることとなる。全体労働者のさまざまな機能は、簡単なものもあれば複雑なものもあり、高級なものもあれば低級なものもあり、きわめてことなる訓練の質と量を生む。ここに労働力の等級的編制・労働者内部の階級を生み出すのである。

労働者と道具とを要素としたマニファクチュアは、道具が機械に推転することによって近代的な工場に進展する。

機械は、手によってつかまれ操作された道具、したがって人間の身体の延長の枠をこえなかつた道具が、機械によつてつかまれ操作されることを、その本質的理解とすべきである。かくして、機械の成立により生産における人間の生理的限界はとり払われ、自然諸法則の意識的利用により生産技術は無限に發展し、生産力の無限の發展を可能にした。労働の生産性はかぎりなく増大する。

マニファクチュアが部分労働者を中心にした機構であるのにたいして、工場は機械を中心にした機構である。部分機械はそれ自体として質的な發展をとげると同時に機械体系として發展してゆく。部分機械は同種作業機の単純協業、およびさまざまな異種機械の協業、それぞれの異種機械群の量的比例性をもつ均衡体系に形成せられる。そのとき、部分諸機械は、単一の動力機を動力源とし、伝導機構によって結合せられた巨大な一箇の機械と化する。機械体

系は多数の労働者の共同的労働によってのみ機能させることができる、したがって、協業は機械体系の成立によって、逆にそれが技術的必然となる。

工場は、機械体系を動かす労働者の分業である。道具による部分労働の熟練度による等級的編制にかわって、熟練内容の変質により、年令別・性別の自然的な区別が重要な意味をもってくる。かつまた、機械に関する科学的知識をもった労働者と機械の運転・保守等の機械体系に規定された分業が生ずる。労働内容は機械の運動に適合するものであり、そのための修業である。熟練度が剝奪されるにつれ、労働者の交替互換性は増大する。労働者はいよいよ部分機械の部品・付属物と化す。機械体系の斉一な運動は、労働者のそれへの技術的隷属とともに、年令・性・技能にもとづく独自の構成を生み、兵營的な規律を生み出し、この規律は発達して完全な工場体制を生み出す。

以上の論述により、産業における官僚制の成立と展開の論理と内容を把握することができる。官僚制組織は、何よりもまず合法的支配の純粹形態であり、規則を中心として動くものであるが、産業における官僚制は労働の生産性の向上の法則に導びかれ、その貫徹のなかに必然的に形成せられざるをえないということ。協業こそいっさいの組織の出発点であるが、そこに労働の生産性向上の基礎が伏在していること。分業が協業の特殊形態として成立し固定化してくると、そこには部分労働者・専門労働者が成立し、そこに専門化と階層化が形成せられ、その部分労働は賃銀労働者によって生涯担われる。まさにヴェーバーによって特徴づけられ官僚制特有の機能様式の諸点としてかかげられたものに相応するものである。もっとも、産業における官僚制の特徴は、この官僚制組織は機械体系と結合合体せしめられたものであり、そのとき、むしろ機械を主人公とし、人間はその従的存在としたものとしての組織である点が注目されるのである。

協業は大きくなればなるほど、そこに必然的に生れる管理階層を多くし、分業専門化により、明確な職務規程をもった体系たる官僚制が成立する。産業官僚制の特徴は、機械体系を基幹としそれと合体した分業にもとづく協業、機械体系を主人公としそれと合体した官僚制たる点にある。

## 2

マルクスは言うまでもなく、産業における官僚制の成立・展開を論じたのではない。相対的剰余価値生産という資本の論理の具体的内実を語ったら、それが産業官僚制の成立を語ることになったまでである。労働の生産性の向上を、人間のための労働の生産性の向上ではなくして、資本のためのいいかえれば価値増殖のための労働の生産性として把握し論述したのである。だから、本来人間のための労働の生産性の向上の成果が、一切資本そのものの成果としてかすめとられ、資本に帰属し、資本を大きくし、逆に一層人間にたちむかい、人間を卑小なものとし、抑圧、隷従することになること、相対的剰余価値生産の方法そのもの、官僚制的組織そのものが資本の現実的姿態として人間に對立し、人間を抑圧・隷従せしめるものと化している側面を力こめて論述しているのである。以下、その点について略述するが、労働の生産性の成果が資本の帰属となる生産物配分に関する論点、価値的把握は省略し、もっぱら労働過程そのものにおける非人間的・反人間的な論点にかぎることとする。

協業において、指摘せられていることは、協業において成立してくる指揮・監督の機能が資本の機能となることである。彼はいう。「指揮・監督および媒介のこの機能は、資本に従属させられた労働が協業となるやいなや、資本の機能となる。資本の独自の機能としては、指導という機能が独自の特徴をうける。資本の機能としての管理労働は、

搾取・抑圧の機能であり、協業という社会的過程に生ずる諸労働の連絡は、観念的には資本家の計画として、実践的には資本家の権威として、諸労働者の行為を資本家の目的に強制的に服従させる資本家の意思の力として、現象するのである。資本家のこの専制的支配は、協業が大規模化するにつれて、独自の諸形態を展開することになる。員数が増大するにつれて、軍隊が士官・下士官を必要とすると同様に、産業においても産業将校（支配人・マネージャー）産業下士官（職員）を必要とし、ここに管理の階層が成立し、資本家の労働者の搾取・抑圧の内容をもつ管理機能は、特殊な賃銀労働者に権限委譲せられることになる。共同的労働過程の本性から生ずる計画・指導・調整の機能は資本制的すなわち敵対的機能となる。資本家は指揮者であるから資本家ではなく、資本家だから指揮者となるのである。

協業の論理は分業・機械制工業の基礎論理であるが、分業はさらに次の特殊的な資本性格、非人間的・反人間的性を付加することになる。

資本の実存形態としての分業は、本来自立的な諸個人を、搾取・抑圧する資本家の管理と規律のもとに従わせるばかりではなく、その上に労働者そのものの等級的な編制を生み出すことにより、労働者そのものの内部に搾取抑圧の体制を生み出すのである。労働者は部分労働者・細目労働者として細目労働の熟練度を高めることにより、自らを不具化畸形化し、資本に身をうり、資本に搾取される以外には自らの存立は不可能となる。労働者各人が自らを管理する精神的機能は失われて、その機能は資本家の専属的機能となり、自らが失なったものは資本に集積せられて自分を支配する力となって対立してくる。

機械は資本制的に利用せられ、資本の実存形態としてある限りは、人間の労苦を軽減するものではなく、逆にそれ

は搾取・抑圧の手段として人間に対立してくるものである。

機械は筋力を不要化し、労働を単純化することにより、成年男子のみを搾取材料としていた分野を婦人・児童をも搾取材料と化して労働市場に引き入れ、成年男子は妻子を売る奴隷商人となると同時に、自分の競争相手となった妻子と労働強度を競い、ともに肉体的荒廃・精神的萎縮をもたらし、機械の終日的連続操業と機械の運動速度に合せて労働時間は延長（交替制もふくむ）せられ、労働は強度化せられることになる。

マニユファクチュアではまだ道具を労働者がつかったが、工場では労働者は機械につかえる。マニユファクチュアではいまだ主観的には労働者が主人公であったが、工場ではじめて労働者は資本の奴隷たるの現実性を技術的にも感覚的にもうけとることになる。全体労働に不可欠の精神的力能はもちろんのこと、個別労働の過程において必要であった精神的力能も、機械の側にすい上げられてしまい、それがまた労働者に対する資本の権力として作用するのである。

機械体系の斉一な運動に奉仕するさまざまな労働者は規則と規律で縛られ、きびしい監督労働のもとにもろもろの処罰にさらされることになる。工場は「緩和された牢獄」と「産業的屠殺場」の体をなす。

以上が、マルクスによって画かれた資本に包摂せられた産業における官僚制の非人間的・反人間的側面であり、疎外の様相である。疎外論を労働の二重性論を挺子として資本の理論として展開したマルクスの資本論のなかでも、最も生ま生ましい部分である。

### 三

相対的剰余価値の生産、すなわち労働の生産性の向上を具体的内容とする生産方法の展開として、協業・分業・機

械制大工業を論ずることが産業における官僚制の成立・展開の見事の論述であるとして紹介し、さらに、産業における官僚制の展開は資本に包摂せられた官僚制として、非人間的・反人間的模様を若起し、くりひろげざるをえないさまが、マルクスによって論じられたのである。だが、ここでははっきりした問題が浮び上ってくる。それは、マルクスの論述を否定するものではなく、むしろそれを積極的に肯定した上でなお生ずる問題である。すなわち、ヴェーバーは官僚制そのものを合理的なものが非合理的なものを生むとして把握していたのに対して、マルクスにおいてはそれが必ずしも明瞭ではない、という点である。むしろ、ここでは、非人間的・反人間的様相の一切の責を資本に負わせているかのごとき、筆致がみられるのである。一切の責を資本に負わせているといってもよからう。ヴェーバーは、官僚制を抑圧の武器であり、隷従の器ととらえたのに、マルクスは、機械体系を手段とした協業・分業の体系たる産業官僚制そのものを、かならずしも、抑圧の武器・隷従の器としてはとらえていない。この点について、より精しく、みてゆくことにしよう。

協業は資本制生産の基本的形態であり、歴史的にも論理的にも出発点であるとして、論ぜられている。そして、その設定にふさわしく、管理機能の問題がここでとり上げられている。さきにももちろんふれたが、ここであらためて検討しなければならない。

まことに、マルクスの言うように、「およそ、大きな規模で行われる直接に社会的または共同的な労働は、大かれ少かれ指揮を必要とするのであって、この指揮により、個別的諸労働の調和が媒介され、全生産体の——その自立的諸器官の運動と区別される——運動から生ずる一般的諸機能が遂行されるのである。ヴァイオリンの独奏者は自分しんを指揮するが、オーケストラは指揮者を必要とする。」マルクスは、これにつづけて、すぐ次のように言う。「指

揮監督および媒介というこの機能は、資本に従属せられた労働が協力的となるや否や、資本の機能となる。資本の独自の機能としては、指揮という機能が独自の特徴をうけとる。」この資本の独自の機能としての指揮・監督・媒介の機能とは、労働者にたいする搾取と抑圧の機能である。だが、問題は、指揮・監督・媒介の機能すなわち管理機能は果して、管理機能そのものとして抑圧的性格をもたないか、非人間的性格をもたないか、という点である。

マルクスは、つづいて、「大規模な協業の発展につれて、資本家の専制支配がその独自の諸形態を展開する」として、産業将校Ⅱマネージャー・産業下士官Ⅱフォアマンを必要とし、彼等に「資本家であるが故に産業司令官である」資本家は彼のもつ指揮・命令の権限を委譲する、と論ずる。協働の人数が増加すれば、そこにはいわゆる「スパン・オブ・コントロールの法則」と経営学では一般にいわれているものが作用し、一人の管理者が指揮・命令・監督しうる人員には限度があるから、管理者の数は増大せざるをえず、さらにその管理者をまた指揮・命令・監督する管理者が必要となるから、必然的に階層的ピラミッド型の管理労働者の体系が、執行労働者を底辺として成立せざるをえない。このピラミッド型の階層的組織は、資本家であろうとあるまいと協働行為が多数の人数になればなるほど聳立してこざるをえない。このピラミッド型の管理組織が、底辺ないし下部の労働者にとって、抑圧の器にならないという保証はどこにもない。

個人にとって、労働ないし行為は本来自ら目標設定し、計画し、その計画にしたがって自分の行動を統制し、目的を達成するのである。この目標設定・計画・統制の機能が個人からひきさかれ、疎外され、それが他人の専属的機能として自分にのしかかってくるとき、彼はまさにたんなる執行の動物・器具と化し、奴隷と化する。管理がピラミッド型に階層化すればするほど、その可能性は大きくなるのである。ピラミッド型組織Ⅱ官僚制組織それ自体が抑圧の

器であり、資本は抑圧の器たる官僚制を自分の実存形態として、はじめて自己本来の姿態と内実をうけとることになる。むしろ、このように理解し、把握すべきである。

分業における疎外は、「マニユファクチュアの資本制的性格」の節において、語られている。とりあげられる主たる内容は、労働の分割、部分細目労働を労働者が専属的に担当することからくる不具・畸形化である。彼はいう。「ある種の精神的および肉体的畸形は、社会の分業全般からも不可分離なものである。ところが、マニユファクチュア時代は、労働諸部門のこの社会的分割をはるかに前進させ、他面ではそれ独自の分業によって初めて個人の生活根源をおそうのであるから、それはまた初めて産業病理学に材料と刺激を提供する。」また、D・アーカードの言を引用して言う。「人間を細分するとは、彼が死罪に値するときに死刑に処することであり、彼がそれに値しないときには暗殺することである。労働の細分は人民の暗殺である。」労働過程の細分化は、それが資本制的な分業であろうとあるまいと、企業内分業がおしすすめられているかぎり社会主義であろうとあるまいと、そこでは精神的・肉体的な畸形を生み出さざるをえない。

そして、畸形化せられた部分労働者は、自己完結した存在ではなく、ピラミッド型に階層化・専門化せられた協働的行為体Ⅱ官僚制組織体の内部でのみ、その部分としてのみ、自己の維持存続を可能にする。マルクスはこのことを、資本に特有の状況であるかのごとく書いている。「マニユファクチュア労働者は、その自然的性状からして自立的な物をつくることができないのであって、もはや資本家の作業場への付属物としてのみ生産的活動を展開する。選ばれた民の額には彼がエホヴァの所有なることが書かれてあるの同様に、分業はマニユファクチュア労働者にたいし、彼が資本の所有なることを示す刻印をおすのである。」産業官僚制のあるところ、労働者たちは、官僚制のヘル

(主人公)が資本家であろうと誰れであろうと、ヘルの差は差として彼の運命は同じなのである。

機械は本来人間の労苦を軽減するものであるべきであり、人間のつくり出したものであった。それが人間に敵対し、人間を労苦に追い込むものと化していることについては、マルクスをかりてさきにのべた。彼はこのとき、大規模な機械の利用そのものが人間に対し、人間に立ち向い、これを抑圧する可能性と現実性をつねにはらんでいるものとしてはとらえていない。ユアの言を引用しながらの工場の説明の箇所にも明らかに表明せられている。彼は、ユアの工場についての説明をとりあげ、「たえず一中心力(原動力)によって活動せられる生産的機械体系を、熟練と勤勉をもって監督するさまざまな部類の成年および未成年労働者たちの協業」という第一の表現と、「一箇同一の対象を生産するために協同一致して絶え間なく作用する。かくしていづれも自動的な一箇の動力に従属させられている無数の機械的器官および自己意識ある器官から構成された一箇の自動装置」という第二の表現の相異点をつかまえ、そこを強調する。第一の表現では、結合せられた全体労働者が主体であり、機械的自動装置は客体として現われているのたいして、第二の表現においては逆に機械的自動装置が主体であり、労働者は意識ある器官としてののみ、意識なき器官たる機械の付属物としてのみ存在している。そして、「第一の表現は、大規模な機械のありとあらゆる充用にあてはまり、第二の表現は、その資本制的充用を、したがってまた近代工場制度を特徴づける」と結ぶ。

ここでもマルクスは、本来人間が主人公であるべきはずなのに、機械が主人公になってしまふという特徴を資本のせいにしてている。そのこと自体、決して間違ではない。資本制的生産において、この転倒を生ぜしめるものは、機械の資本制的利用にほかならないからである。だが、この転倒は、ひとり機械の資本制的利用の場合のみにかざら

ず、それが生ずる可能性と現実性はつねに存在していることを、理解しておかねばならない。すなわち、利潤追求のための機械の利用でなくとも、労働の生産性の向上・生産力の増大自体がそれが、相対的剰余価値の生産方法と呼ばれる状態のもとに追い求められようとそうであるまいと、労働の生産性の増大・生産力の増大がそれ自体、善とせられ、聖なるものとされるかぎり、この転倒は容易に生ずるのである。

道具だったら、人間が道具の付属物になりっこない。なろうとしてもなれない。人間は生産における主人公である。その生産が資本に包摂せられようとせられまいと、技術的にはそうである。だが、機械が成立し、発展してくと、生産において決定的役割を果たすものは技術的には機械であつて人間ではない。もちろん、機械をつくるのは人間である。だが、生産の場、仕事の場においては、人間は機械が仕事をするのを補助する存在にすぎない。機械は自ら動力をもち、機械はみずから仕事をする。その動力はいわば無制限的に巨大であり、その仕事はどこまでもより早く、より正確に、しかも自動的になされる。人はただ、それを見守り、それを補助するにすぎない。もちろん、人間なくしては機械の稼動は不可能ではある。しかし、生産という観点からみるかぎり、労働者はいくらでもとりかえることができるが、機械体系の方はかけがえない。人間の動きに合わせて機械は動くのではなく、あくまで機械の動きに合わせて人間は動かなければならない。

人間の価値・人間の尊厳は比類ない。しかし、生産の場においては、機械は人間の何千人・何万人分の仕事をす。その価値は、個人の何千倍何万倍かである。資本制生産の場であろうとあるまいと、生産を目的とする場であるかぎり、人間より機械が重視せられ、機械が主人公にならないという保証はどこにあらう。

道具で物をつくっていたとき、設計も、工程も、労働時間も、労働の強度も、その仕事の成果の良否も、多寡も、

みな労働者のものである。だが、機械的生産となると、労働者の精神的機能は、直接的生産者からは分離剝奪せられてしまう。何をつくるか、どのようにつくるか、どれだけつくるかはもちろんのこと、労働時間・労働強度をきめるのも直接的労働者ではなくなってくる。労働者は機械の付属物にすぎなくなる。だから、マルクスのつぎの表現が可能となったのである。「すべての資本制的生産にとっては、労働者が労働条件を使用するのではなく逆に労働条件が労働者を使用するということが共通しているが、しかしこの顛倒は、機械をまっぴりしてはじめて技術的感覚的な現実性をうけとるのである。」

さらに言えば、マルクスの次の表現は、技術的必然であって、資本制的必然ではない。より正しくは、技術的必然を資本が内包することによって、資本制的必然とした、というべきであろう。だが、ここでは、極端な言い方をしておこう。「労働手段の齊一な歩調への労働者の技術的隷属と、男女両性および種々さまざまな年齢の個々人からなる労働体の独自の構成とは、兵營的な規律を生み出すのであって、この規律は、発達して完全な工場体制となり、すでに以前に述べた監督労働を、つまり、平労働者と労働監督者との——産業兵卒と産業下士との——労働者分割を、完全に発達させる。」すなわち、ここでとりあげられている問題は、機械による生産体制は「兵營的な規律」を生み出し、それを必要不可欠とするということである。機械的生産は、官僚制的組織を必要不可欠とするということである。マルクスがここで引用しているユアの言を、また引こう。「自動的工場における主要な困難は、人々をして労働における不規則な習慣をやめさせて、彼らを大自動装置の不変的な規則正しさに一致させるために必要な規律にあった。だが、自動的体系の要求および速度に適合する規律法典を考案して有効に実施することは、ヘルクレスにふさわしい事業、すなわちアークライトの高貴な仕事であった！」

機械体系を手段とする協業は、規律および規則Ⅱ工場法典を不可欠とし、法的支配、その純粹型たる官僚制を完成する。法の執行すなわち行政は、ヴェーバーによれば、「没主観的な官職義務にもとづく職業労働であり、この行政の理想は、怒りも興奮もなく、個人的動機や感情的影響の作用をうけることなく、恣意や計算不能性を排除して、なかなかづく人による差別をすることなく、厳に形式主義的に、合理的規則にしたがって、——あるいはこれが不可能なときは——没主観的な合目的性の見地にしたがって、処置をするということである。服従義務は、下級官職の上級官職への服属と秩序ある訴願手続とを伴う官職階層制によって、階級づけられている。技術的な機能作用の基礎は経営規律である」そして、「規律とは、その範囲を挙示しうる多数のひとびとの間において、一つの命令に対して、彼らの習性化した態度によって、敏活な自動的な型どおりの服従を見出しうるチャンスをいう」のである。機械制協業において、「恣意」が許されようはずはなく、価値生産の場において、徹底的に計算不能性の排除がなされること、いうまでもない。規律について、ヴェーバーはまた、「軍隊の規律はおよそ規律一般の母胎であり、規律を仕込む第二の偉大な教育者は経済上の大経営である」とも言っている。

ともあれ、機械制協業は、兵營的な規律、法典を生み、法によって支配せられる体制、官僚制を生み出すが、マルクスはその法典が資本家的性格にそめ上げられたものであることの指摘を忘れない。「工場法典——これにおいて資本は、ほかの場合ではブルジョア階級によってはなはだしく愛好される権力分割および一そう愛好される代議制度なしの、自分の労働者にたいする自分の専制支配を私法的かつ独裁的に定式化している——は、大規模な協業および共同的労働手段、ことに機械の使用とともに必要となるところの、労働過程の社会的規制の資本制的戯画にすぎない。」だが、機械体系の齊一な運動に合せて、職種別かつ男女・老弱さまざまな労働者が行動し、技術的に隷属させるため

に、不可欠に生み出される規律法典、その規律・法典を守るための監督・司法の体制、この体制は資本制的なものであろうとあるまいと、労働者個人に対して抑圧の体制・圧服の体制として作用することにはわりはない。<sup>(3)</sup>

以上、協業・分業、機械制協業においてマルクスがその資本制的性格として論じてきたものをかなり精しくとりあげ、それを官僚制的性格のものとして論評を加えてきた。

相対的剰余価値生産の方法として、協業・分業・機械制分業の展開、換言すれば機械を体躯とした官僚制の形成。目的合理的な生産方法の追求の結果、必然的に形成せられてくる産業における官僚制の形成。そして、マルクスは、協業・分業・機械制分業が資本制的関係のもとになされるとき、いかに、それが非人間的、反人間的、疎外的状況を生み出すかを論じたことを一おう肯定的に紹介した。たしかにその通りである。だが、次に論じたことは、このマルクスによって画かれた資本制的協業・分業・機械制分業のもつ疎外的現象は、資本制生産であろうとあるまいと、およそ協業・分業・機械制分業、すなわち産業官僚制のもとにおいては、いずれ疎外現象を惹起せざるをえないと強調したのである。

協業の規模が拡大するにつれて、管理・被管理関係の成立、管理間・被管理間における階層の階梯数の増大、分業における労働の細分化・専門化、機械体系の成立による労働者の機械への附属物化、機械体系の斉一な稼働に対応する規律の強制と法規の制定。これらはいずれも、それ自体で人間の精神的力能と肉体的力能の分裂であり、労働の細分化・分裂であり、人間の機械の奴隷化であり、疎外現象以外の何物でもない。この産業官僚制を資本制生産は生み出したのであり、資本は産業官僚制を労働者に対する支配・抑圧の体制として自己のものとしているのである。そして、産業官僚体制を自分のものとするにより、資本は、はじめて資本の労働に対する支配体制を確立したのであ

(1) 世良晃志郎訳『マックス・ヴェーバー・支配の社会学Ⅰ』創文社三六一—三七頁

(2) 河出版『資本論』第一巻 三四〇—三四一頁

(3) ところでエンゲルスの *Dell' Autorialia* 『権威原理について』をとりあげよう。彼はいう。「権威とは、他人の意思を吾々の意思に従わせることである。だから、権威というものは従属を前提にしている。」

そして、個人行動はあらゆる面で協力的行動に駆逐されてきた。「協力的行動を語ることは組織を語ることである。」権威を伴わない組織はない。紡績工場では「全ての労働者が蒸汽の権威に従って決定される一定の時間に作業をはじめ、また終わらねばならぬ。」大工場の自動的機構は、労働者を搾取する小資本家の場合よりも、くらべものにならないほど暴君的である。すくなくとも、労働時間にかんすかぎり、大工場の門には、次のように書いてさしつかえない。「ここにゐる諸君は、すべて自律をすてよ」。人間が科学と発明の力をかりて自然力を征服すれば、自然力は、それを利用する人間を、社会関係から独立した真の専制主義に服させることによって報復する。大工業で権威を廃止することは、工業そのものを廃止することであり、糸繰車にもどるために蒸汽紡績を否定することである。」

「なんびとによって代表されようと、一方におけるある種の権威、他方におけるある種の従属は、社会機構とは無関係に、吾々が財貨を生産流通させる物質的諸条件とともに、いやおうなしに自分をおしつけてくるものである。」「生産と流通の物質的諸条件は、不可避的に、ますます多く、大工業および大農業の影響をうけるので、そのためにこの権威の領域もますます拡大してゆく。」

そして、「革命は間違ひなく、ありとあらゆるものななかで、もっとも権威的なことがらであり、人口の一部が小銃や銃剣や大砲によって、およそもっとも権威的な手段によって、己れの意思を他に押しつける行為である。」(『マックス・エンゲルス選集』大月書店、第十三巻の上、四九—五二頁)

エンゲルスのこの反権威主義者批判の論述は、まことに見事である。エンゲルスは、組織には権威が不可欠であり、組織が大きくなればなるほど権威も大となる、社会制度のいかなをとわず、と主張しているわけである。そして、それを支配し従属とも把握しているわけである。この問題を、踏み込んでとらえていったヴェーバーのものをエンゲルスが読んだら果して何と

言うであらうか。ともあれ、このエンゲルスの論述をマルクス・エンゲルスの思想のなかでどのようにとらえたらよいのだろうか。

#### 四

産業における官僚制の成立について、マルクスの論述がもっともすぐれたものであるとして、これを取りあげてきた。「労働の生産性向上」の資本の内的衝動がそれを担う資本家の意識において目的化され追求されたこと、そして、その具体的内容たる協業・分業にもとづく協業、機械を体躯とした分業にもとづく協業の成立展開の過程が、言葉をかえれば産業における官僚制の成立の歴史と論理であることを示した。ついでに、マルクスが、この過程を同時に、非人間的反人間的過程、疎外過程としてとらえていることをも精しく紹介した。そして、さらに、この疎外をもっぱら資本によるものとして記述し、官僚制的組織そのものによるものとして画いていないことを、かなり力をいれて論じた。それにより、産業における官僚制そのものの悪・疎外が明らかにされたとすれば、いちおう、この稿も終ってよいわけである。だが、マルクスがなぜに、資本による疎外と官僚制による疎外とを識別しなかったのか。あるいは、それを識別した叙述をしなかったのか。たしかに官僚制組織の疎外も資本に包摂せられているかぎり、資本による疎外として現象し、資本の疎外となつてはいる。だが、それを識別する叙述をどこかで、一言でも明言しておく必要はなかったであらうか。この問題をそのままして、この稿を終るわけにはゆくまい。

マルクスは、官僚制組織がそれ自体抑圧の機構であることを、十分に知っていた。「常備軍、警察、官僚制度、僧職、裁判所というあまねくゆきわたった諸機関——系統だった階層制による分業計画にもとづいてつくりあげられた

諸機関」は、本来抑圧的なものであり、だからこのようなピラミッド型組織が社会主義社会に残存することほど矛盾にみちたことはない、とマルクスの口から語られていることについては、さきに拙稿「官僚制と社会主義、ノートーマルクス、レーニン、ヴェーバーの紹介と吟味——」（『未来』昭和四四年三月号）においてとりあげたので、ここでは、その指摘にとどめる。「系統だった階層制による分業計画によってつくりあげられた諸機関」のなから企業が除外されていることだけを指摘しておけばよい。なぜ産業における官僚組織だけが免罪されたのであろうか。結論的にいえば、唯物史観の確立という以外にない。だが、ここで、マルクスにおける唯物史観の成立を真正面から論ずるつもりはない。官僚制そのものもつ疎外性を把握する姿勢をもち、そのような論述をしていたマルクスが、企業における官僚制の悪を積極的に指摘しないマルクスになってゆく過程だけを明らかにすれば、ここでは十分であろう。それは同時に唯物史観の成立の一つの把握でもある、と言うこともできよう。

## 1 『ヘーゲル国法論批判』

マルクスは官僚制批判については、すでに『経済学哲学手稿』（一八四四年）よりも早く、『ヘーゲル国法論批判』（一六四三年夏）において、まさに天才的洞察を示している。彼は、ヘーゲルが官僚制を国家と市民社会の中間層として、両者の媒介・調整的役割を担うものとしてとらえたことを、徹底的に批判する。

官僚制の本質として「国家目的が官庁目的に、あるいは官庁目的が国家目的に化する」とその転倒性、幻想性をあばき、形式主義と精神主義のメカニズム、公私の論理、官職と試験の意味、位階性の罪悪が論ぜられ暴かれている。そして、ヘーゲルの結論とは逆に、官僚制は中間層でもなければ調停的役割を担うものではなく、それ自体が抑圧の

機構であることを明らかにしている。

ここで展開せられているマルクスの論述の一つ一つから汲みとるべき大きなものがあるが、ここではその作業はしない。ただ、ここでは、官僚制は官僚制それ自体としての悪があげられており、官僚制の悪・疎外性・抑圧性は所有関係・階級関係とは何のかかわりもなく論ぜられていることを指摘しておけばよい。なお、つくくわえるとするならば、この官僚制把握が、のちに唯物史観が確立したのちにおいて、さきにも指摘したように『フランスの内乱』（一八七一年）のなかで、「常備軍・警察・官僚制度・僧職・裁判所というあまねくゆきわたった諸機関——系統だった階層制による分業計画にもとづいてつくりあげられた諸機関」をそれ自体抑圧の機構として、それを一方の手から他方の手に移すことではなく、こなごなにうち砕くことが革命だ、と言わしめていられると思われる。そのことは、初期マルクスは後期マルクスに、どこまでも生き続けていたことの証左でもある。

さて、マルクスが産業における疎外を積極的にとりあげた最初の作品は、周知のように『経済学・哲学手稿』である。

## 2 『経済学哲学手稿』

フォイエルバッハに影響され、宗教的・世界の根を現世的・経済的な世界においてとらえはじめたマルクスの姿は、『ユダヤ人問題によせて』（一八四四年）において最も鮮烈にみとることができる。彼は、この論文の中でユダヤ教の基礎は利己主義であり、その神は貨幣であり、その信仰行為はきたない金もうけだと主張する<sup>(2)</sup>。そして、労働の疎外、疎外され外在化された労働の結晶として貨幣をとらえている。この把握が、『経済学哲学手稿』において徹底

的に展開せられるのである。

だが、ここでも、いまだ「まこと自由こそ人間の本質である」と唱いあげた一八四二年ライン新聞に寄稿した『出版の自由と州議会の議事の公表とに関する討論』におけるマルクスの人間観は残っている。いや、終りまでマルクスが、この人間把握から離れたことはなかったといつてよからう。この手稿のなかで、周知のように、労働の疎外、労働生産物の疎外、労働諸条件の疎外、人間の疎外を論じ、疎外され、外在化された労働の帰結として私有財産を論じ、資本と労働の対立が論ぜられている。その中で「自由な意識的活動こそ人間という類の本質である」という人間規定があり、そして疎外論の究極的把握は、この人間観に由来するものなのである。このことは別の機会に論じよう。

ここで私有財産制がクロース・アップされ、資本と労働との対立が論ぜられはじめ。だが、しかし、ここでとりあげられている分業は、いまだ分業の悪、分業にとまなう疎外性が私有財産制とからませられてはいるけれども、分業それ自体が疎外態であることが、はつきりつかまれていることを指摘しておかねばならない。その箇所を引用する。

「分業とは、疎外のわくのなかでの労働の社会性の国民経済学的表現である。いいかえれば、労働こそが外在化のわくのなかで人間の活動の一つの表現、生活の外在化としての生活表明にすぎないものであるから、分業はまた《実在的な類の活動という人間活動、ないし類的本質存在たる人間の活動として人間の活動を、疎外態において、外在的においてうちたてること》<sup>(4)</sup>以外のなものでもない。」

労働の疎外の契機を私有財産においてとらえたマルクスは、もちろん分業の疎外の契機もまた私有財産においてとらえていることは言うまでもない。だから、この分業規定にすぐつづいて、つぎのようにいう。「労働が私有財産の

本質として認識されるや、ただちに分業が富の生産の主要な動因として把握されざるをえなかつたことは、あたりまえの話である。ところが、国民経済学者たちはこの資本の本質を、すなわち類の活動として人間活動のかかる疎外され外在化された形態をあまりにもあいまいにしかみとめていない。」（「第三手稿」、「私有財産の支配下および社会主義下における人間の欲求の意味。浪費的な富と産業的な富との現象。ブルジョア社会における分業」より。河出版三浦和夫訳）

### 3 『ドイチュ・イデオロギー』

『経済学哲学手稿』が書かれてから二年後の一八四六年に書かれた『ドイチュ・イデオロギー』をもって唯物史観ないし史的唯物論の成立のメルクマールとされている。「ネズミのかじるがままの批判」にさらされてバラバラになり、今なおマルクス・エンゲルスが発表を意図したかたちに復元せられてはいないといわれているが、それはのちに『経済学批判要綱』の序説として下書きされ、現在『経済学批判序説』の名で知られている唯物史観の体系的叙述の原型であることは、容易に看取することができる。一般に、初期マルクスとして『経哲手稿』までとりあつかい、唯物史観の成立を『ドイチュ・イデオロギー』をもってしているのは当然である。

唯物史観は階級史観である。人間の本性を自由にある、意思の自由にあるとみて、そこに立脚していたマルクス、すなわち個人の集合としての人間をみていたマルクスは、個人から階級に把握の重点はうつす。しかし、彼にとり終りまで、個人は出発点であり終着点であることには変わりない。「唯物史観の出発諸前提」として、「われわれがそこから出発する諸前提は、なんら任意のものでも教条でもなく、それはただ想像のなかでのみ捨象しうるような現実的

諸前提である。それは現実的個人であり、かれらの行為とかれらの物質的諸前提——既存のものであれ、かれら自身の行為によって生みだされたものであれ——である」と規定している。この出発はそのままでは唯物史観にはならない。これまでのマルクスはそのままでは唯物史観のマルクスにはならない。その媒介環は、次の言葉である。

「人々は、人間の意識、宗教その他任意のものによって動物から区別することができる。それができよう。」そうだ、マルクスもそのようにこれまで区別してきた。「だが、人間自身は、かれらに必要な生活手段を生産しはじめるや否や——この一歩は、かれらの身体的組織によって制約されているものであるが——みずから動物から区別しはじめる。」ここが転回点である。「人間がかれらの生活手段を生産する様式は、なによりもまず既存の生活手段そのものの性状に依存している。」そこで、「諸個人がかれらの生活をあらわす仕方がすなわちかれらの存在の仕方なのである。」だから、「かれらが何であるかは、かれらの生産と、すなわち、かれらが何を生産し、またいかに生産するかということと一致する。したがって諸個人が何であるかは、かれらの生産の物質的諸条件に依存している。」<sup>(5)</sup>こうとらえれば、あとは一本道である。生産力の発展と生産手段の所有関係のからみ合いの展開が歴史として把握される形に結晶してゆくまでである。とはいえ、唯物史観の公式まで、『ドイチュ・イデオロギー』が結晶していないのはいうまでもない。ここで、とりあげるはその点であり、その点を主として分業論とのかかわりにおいて、見ようというまでである。

『ドイチュ・イデオロギー』においては、分業論は、実質的にきわめて大きな位置と意味をもたされている。マルクスの分業の概念は、のちに企業内分業と社会内分業として分化せられてとらえられる素地をここですでに見せているが、やはりその両者を決定的に区別してはならず、いわばスミスの把握にとどまっていることをまず、断わって

おこう。

生産力の発展は、ほぼ分業の発展としてとらえられている。「ある国民の生産力がどれだけ発展しているかは、分業が発展している程度によって、いちばんはつきりしめされる。」そして、「分業のさまざまな発展段階は、とりもなおさず所有のさまざまな形態にほかならない。（すなわち、分業の各段階は、労働の材料や用具や生産物の関係からみての諸個人相互の関係を規定するのである）」として、分業の発展段階即所有の発達段階を第一の形態たる種族所有、第二の形態たる古代的な共同所有および国家所有、第三の形態たる封建的あるいは身分的所有と把握している。これは、いうまでもなく、のちにアジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的生産様式と把握せられるにいたる原型である。

分業の発展は、他の文脈において、「物質的労働と精神的労働との分割」、その最大なるものとして都市と農村の分離・対立が論ぜられ、よりすすんだ分業として、「生産と交通の分離すなわち商人という特殊な階級の形成」、「さまざまな都市のあいだの分業」、「その分業がもたらした直接の結果としてのマニファクチュア——同種組合制度のなかから成長してきた生産部門」の発生と発展とが論じられ、さらに「大工業——産業的目的への自然諸力の利用、機械関係およびもっとも広汎な分業」が論ぜられ、そして、自分ならびに社会を疎外から解き放つものとして『ヘーゲル法哲学批判序説』（一八四四年）の末尾に初めて登場せしめられたプロレタリアートが、ここでは当然大工業との関連において語られている。

さて、分業を労働の外在態、疎外の外在態としてとらえた『経済学哲学手稿』の立場は、ここでもそのまま受け継がれている。そしてそこから、当然の帰結としてでてくることは、分業即所有関係と把握せられているから、疎外の

克服は所有關係の止揚であると同時に分業そのものの止揚でもあるということである。ここでは、いまだ個人より出發し、所有・階級の概念が成立してはいるけれども、なお最後には個人に帰えってくるマルクスの立場が誰にも、紛れもなく読みとることが出来る。

「諸個人はいつでも自分から出發してきたし、いつでも出發している。かれらの諸關係はかれらの生活の現實的過程の諸關係である。かれらの諸關係がかれらに對立する獨立の存在となるということが、どこから起ってくるのか？ かれら自身の生活の諸力がかれらを支配する諸力となるということが、どこから起ってくるのか？ 一言で答えるなら分業である。そして分業の諸段階は、あたえられた時点で達した生産諸力の發展に依存している。」

疎外の克服すなわち分業の克服についての次の箇所を引用しよう。マルクスは、フョイエルバッハが、疎外を單なる精神的所産であり、幻想を除去すれば解放されると論じたのにたいして、幻想の發生する物的なものの克服をより徹底した唯物論者として、次のようにいう。「分業による人格的な諸力（諸關係）の物的な諸力への転化は、ひとびとがそれについての一般表象を忘れることによって廢棄することができず、ただ諸個人がこれらの物的な諸力をふたたび自分たちのものに包摂することによってのみ、そしてただ分業を絶滅することによってのみ廢棄することができる。」マルクスは、ここでは明白に、分業そのものか疎外態であり、疎外からの解放は「ただ分業を絶滅することによってのみ」可能だ、といっているのである。では、それは、いかにして可能か。「このことは共同社会（Gemeinschaft）なしには不可能である。個人がそれぞれ自分たちの素質を全面的に發達させようとする諸手段は、共同社会のうちのみ存在する。したがって、共同社会のなかではじめて人格的自由が可能となる」このように、マルクスが終局的に目指しているものは、またしても、諸個人の自由である。そのことは、共産黨宣言の中で、同じく

力強く表明される。「階級を階級対立とをもった古いブルジョア社会のかわりに、各人の自由な発展が、すべての人びとの自由な発展の条件となるような、一つの協力体があらわれる。」

#### 4 『哲学の貧困』

『ドイチェ・イデオロギー』の書かれた翌年一九四七年に、『哲学の貧困——ブルードン氏の『貧困の哲学』に対する回答——』が出された。その第二章「経済学の形而上学」の第二節が「分業と機械」と題されている。

マルクスは、ここではじめてスミスを抜け出て、作業場ないし企業内分業と社会内分業を明確に区別するにいたっている。「社会全体は、これまでその分業をもつという点で、作業場の内部と共通している。もし典型として近代的制作場のなかの分業をとり、それを社会全体に適用したならば、富の生産のためにもっともよく組織された社会は、もちろん、ただひとりの企業主だけをもち、仕事をあらかじめ定められた規則にしたがって、共同体の成員に分配するような社会になるだろう。しかし、そんな社会は決してない。近代的制作場の内部では、分業は企業家の権威によってこまかく規制されているにたいし、近代社会は自由競争よりほかに、労働を分配すべき規則、権威をもたない。」

この文章は、作業場内分業と社会内分業とを区別したものであり、資本論における「作業場内分業にあつては先験的かつ計画的に守られる規則が、社会内分業にあつては内的な、沈黙の価格の晴雨計の変動において知覚されうる。商品生産者たちの無規律な恣意を征服する、自然必然性として、ただ後天的にのみ作用する」という表現に發展してゆく原型である。だが、ここで問題となるのは、「富の生産のために最もよく組織された社会は」、「近代的制作場の

なかの分業をとり、それを社会全体に適用した」ものであり、その社会は「もちろん、ただ一人の企業主をもつだけであり、仕事をあらかじめ定められた規則にしたがって共同体の成員に分配するような社会である。」ところが、「しかしながら、そんな社会は決してない」とマルクスはいっているのである。果してそうか。現在のソ連は、マルクスが「そんな社会は決してない」といったような社会ではないのだろうか。「富の生産のために最もよく組織された社会は」、必然的にそのようなならざるをえないのではないだろうか。

マルクスが、現代のソ連のような社会は決してない、と考えたのには、二つの理由が考えられる。ひとつには、マルクスはこの時点で社会内分業と作業場内分業との関係を、族長制・カースト制・封建的同業組合制度の諸制度との関連のもとにとらえた結果、つぎのような一般的規則を定立していたからである。すなわち、「一般的規則として、権威が社会内部の分業を支配すること少なければ少ないほど、分業が作業場内部で発達することはいちじるしく、また分業がそこでただひとり権威にしたがうこともいちじるしい。と主張することさえできる。すなわち、作業場内の権威と社会内の権威とは、分業に関して、相互に反比例しているのである。」このような規則を一般的規則として定立すれば、ソ連のような社会は決してない、ということになる。だが、ここで一般的規則としていわれたことは、資本論では、資本制生産社会の一般的規則とされて、次のように表現されている。「資本制的生産様式の社会では、社会的分業の無政府性とマニユマクチュア的分業の専制状態とが相互に制約しあっているとすれば、従来の社会諸形態——そこでは、諸職業の特殊化が自然発生的に発展し、やがて結晶し、ついには法律的に確立された——は、これに反し、一方では、計画的で権威的な社会的労働組織をしめし、他方では作業場内分業をまったく排除するか、さもなければ、それをただ小規模のみ、または散在的かつ偶然的にのみ、発展させる」という表現に変わってきている。

作業場内分業と同じように社会内分業がなされる、すなわち、一つの權威のもとに、きめられた規則にしたがって、共同体の諸成員に仕事分配されるような社会、具体的にいえばソ連のような社会を、マルクスが「そんな社会は決してない」と夢想だにすることができなかったいま一つの理由は、マルクスは分業そのものが悪であると思つていたからである。そんな社会が資本主義の次にくる、とマルクスには考えられなかったにちがいない。『哲学の貧困』の一年前の『ドイチュ・イデオロギー』では、分業は疎外態であり、分業の絶滅をといっているのである。『哲学の貧困』でもこの節では、まずブルードンが「すべての経済学者はスミス以下分業の法則の有利とふつごととを指摘してきているが、ふつごとより有利のほうをずっと多く強調してきている」との言からんで、諸学者の言説を引用した上で「文献的概観を終るにあたり、われわれは正式に《すべての経済学者は分業のふつごとより有利をずっと多く強調してきている》ことを否定する」という作業をおこなっている。分業の絶滅を、この段階ではまだマルクスは考えていたとしている。では、分業の絶滅をどのように展望していたのであろうか。

マルクスは、ここでは、分業の悪を機械によって止揚できる、と考えていたかのごとくである。いまとりあげている「第二節分業と機械」の終りの部分を引用しよう。マルクスは、実にながながとアンドレ・ユアの『工場の哲学または産業経済学』より引用したあげく、次のようにいう。「近代社会の内部における分業の特徴は、それが専門、専門家、またはそれとともに職業の白痴を生むことである。」ヴェーバーを想起させる名言である。そしてこのことを、ルモンティの言を引用して、強調する。「古代人のなかに同一人物が同時にいちじるしい程度に、哲学者、詩人、批評家、歴史家、僧侶、行政官、將軍であるのをみて、われわれは嘆賞の念にうたれる。われわれの魂はこのように広範な領域にわたる種類におどろく。各人は垣根をこしらえ、その囲いの中にとじこもっている。この細分によって

畑が大きくなるかどうかを私は知らない。しかし人が小さくなることだけは、よくわかる。」まことに、近代人はつまらぬ存在になり下ったものだ。

では、豊かな人間にたちかえる、あるいは豊かな人間をとりもどすには、どうしたらよいというのか。マルクスはすぐ続いている。「自動作業場の分業の持徴は、労働がそこではあらゆる専門的性格をうしなつてきていることである。しかしあらゆる特殊の発達をやむと、普遍性の要求、個人の総体的発達への傾向が感じられはじめる。自動作業場は専門家と職業の白痴とを消し去る。」機械の発達による自動作業場の成立、発展が、普遍性の要求、個人の総体的発達を可能とする。すなわち分業の悪をのりこえる、といっているのである。このことは、つづくブルードン批判の言辞により、さらにはつきりする。「ブルードン氏はこの自動作業場の唯一の革命的方面を理解することさえなく、労働者にただ針の一二番めの部分だけでなく、順次一二部分すべてをつくることを申し出る。」マルクスは、ブルードンが分業の悪から脱れる道として示すものは中世の職業団体にかえることにすぎず、「自動作業場の唯一の革命的方面を理解」せよ、といっているのである。

## 5 『経済学批判要綱』

『経済学批判要綱(草案) 一八五七—一八五八年』により、資本論の原型が形づくられている。Ⅰ、序説。Ⅱ、貨幣に関する章。Ⅲ、資本に関する章、第一篇——資本の生産過程、第二篇——資本の流通過程、第三篇——果実をもたらしめるものとしての資本、剰余価値の利潤への転化、追補。の目次だけで説明は不要である。この作品から、それ以前のマルクスとは、はつきり一線が画されることになる。すなわち、資本が主人公となり、生産力は完全に資本のもの

とにとらえられることになるからである。「さしあたり一般的にこれだけのことがいえる——すなわち、労働の生産力の発展——まず剰余労働の産出——は、価値の増大すなわち資本の価値増殖のための必要条件である。無限の致富衝動として、したがって資本は、労働の生産力の無限の増加を追求し、そしてこれをよび起す。しかし他方では、すべて労働の生産力の増加は、——それが資本家にとつての使用価値を増加させることは別として——資本の生産力の増加であり、当面の観点からすれば、それが資本の生産力であるかぎりで、労働の生産力であるにすぎない。」

相対的剰余価値の概念は、この草案ではじめて、つぎのように生まれている。「したがって価値の増加は、資本の価値増殖の結果である。この自己増殖が絶対的剰余時間の結果であろうと、相対的剰余時間の結果であろうと、すなわち絶対的労働時間の現実的増加の結果であろうと、相対的剰余労働の増加、すなわち労働力能の維持のための必要労働時間として、つまり必要労働一般として規定されている労働日分割部分の減少の結果であろうと、そうである」これは第一篇資本の生産過程の稿からの引用であるが、ここではまだ絶対的剰余労働時間とか、相対的労働時間との表現であつて、絶対的剰余価値・相対的剰余価値という表現はできていない。それは、第二篇資本の流通過程の稿になつて、はじめてみられる。「資本を通じての絶対的剰余価値——対象化された剰余労働——の創造は、流通の圏域が拡大し、しかも絶えず拡大することを条件としている。」「相対的剰余価値の生産、すなわち生産力の増大と発展のうえにうちたてられた剰余価値の生産は、新しい消費の生産を必要とする。」

相対的剰余価値の概念は生れてはいるが、この龐大な原種には、相対的剰余価値の生産の内容たる生産力の増大、もっと具体的にいえば、協業、分業、機械制工業については、まったくふれられていない。それは、「一八五九年のプラン草案——一八五七—一八五八年の手稿の七冊のノートにもとづいて、『経済学批判』の『第三章、資本』の章

の第一篇の起草のため<sup>(8)</sup>に、『資本論』に近い構想で示されている。

I 資本の生産過程

1 貨幣の資本への転化

- i 移行
- ii 資本と労働力能との間の交換
- iii 労働過程
- iv 価値増殖過程

2 絶対的剰余価値

3 相対的剰余価値

- i 大衆の協業
- ii 分業
- iii 機械装置

4 本源的蓄積

5 賃労働と資本

I 資本の流通過程

III 資本と利潤

IV 雑録

このプランは、一八六二年に書かれたプラン<sup>(9)</sup>によって、さらに『資本論』に接近せしめられている。

I 資本の生産過程

1 緒論。商品、貨幣

2 貨幣の資本への転化

3 絶対的剰余価値

産業における官僚制の成立

- i 労働過程と価値増殖過程
- ii 不変資本と可変資本
- iii 絶対的剰余価値
- iv 労働的標準化のための闘争
- v 同時の労働日（同時に就業する労働者の数）、剰余価値の総和と剰余価値率（大きさと高さ）

4 相対的剰余価値

- i 簡単な協業
- ii 分業
- iii 機械その他

5 絶対的剰余価値との統一、労働の資本への形式のおよび実質的包摂、生産的労働と不生産的労働

6 剰余価値の資本への再転化、本源の蓄積、ウエクフィールドの植民地理論

7 生産過程の諸結果。占有法則のあらわれの変化は6と7でとりあつかうことができる。

8 剰余価値論

9 生産的労働の理論。

このプランにあつて、『資本論』にはない部分である5章の一部として書かれている「労働の資本への形式のおよび実質的包摂、生産的および不生産的労働」と第七章「生産過程の諸結果」の草稿と思われるものが『直接的生産過程の諸結果第一巻資本の生産過程、第六章』（Erstes Buch, Der Produktionsprozess des Kapitals, Sechstes Kapitel: Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses）である。<sup>(9)</sup>

6 『直接的生産過程の諸結果』

この草稿の中で、とりあげられなければならない問題は、労働の資本のもとへの形式的包摂および実質的包摂という概念である。そして、この概念は『資本論』では姿を消してしまっている。何故だろうか。

この草稿は、「(一)資本の、資本主義的生産物としての諸商品。(二)資本主義的生産は、剰余価値の生産である。(三)最後に、それはこの直接的生産過程を特殊な、資本主義的なものとして特徴づけている全関係の生産および両生産である」この三つの問題を考察している。だが、分量としては、二番目にあげた問題のうち「一、剰余価値の生産としての資本主義的生産」が全体の三分の二を優にしめ、そのなかでまた、「資本のもとの労働の形式的包摂」および「資本のもとの労働の実質的包摂」と見出しをつけて論じられた部分は、これまた相当の分量に及んでいるのである。なぜ、この形式的包摂および実質的包摂の概念は生れ、そして姿を消し去ったのであろうか。

〔剰余価値の生産としての資本主義的生産〕は、『要綱』に立ちながら、生産過程が労働過程と価値増殖過程の統一としての論述が積極的になされる。それが終ったところで、形式的包摂の概念が出てくる。「労働過程は、価値増殖過程の、資本の自己増殖過程の、資本の自己増殖過程の、すなわち剰余価値の生産の手段となる。労働過程は資本のもとに包摂され(これは資本自身の過程である)、資本家は指揮者指導者としてこの過程に入る。それは資本家にとっては、同時に、直接に他人の労働を搾取する過程である。私はこれを資本のもとへの労働の形式的包摂と名づける。それはあらゆる資本主義生産過程の一般的な形態である。だが同時に、それは発展した特殊的・資本主義的生産様式と並存する特殊な形態である。なぜなら、前者は後者を包含するが、後者はかならずしも前者を包含しないからである。」「資本のもとへの労働の実質的包摂または特殊的・資本主義的生産様式」と題された節は、つぎのようにじまる。「相対的剰余価値の生産とともに、生産様式の現実的ながた全体が変化し、特殊的・資本主義的生産様式が(技術学的にも)発生し、それを基礎として、またそれとともに、はじめて資本主義的生産過程に対応する種々の生産要素のあいだの、とくに資本家と賃労働者のあいだの生産関係が発展する。協業、工場内部の分業、機械体系の

応用、一般的にいつて生産過程を自然科学・力学・化学等の一定の目的への意識的応用に、すなわち技術学等の応用に転化することによる労働の社会的生産力、すなわち直接的社会的な社会化された（共同の）労働の生産力、およびこれらすべてに対応する大規模な労働等、個々人の多かれ少かれ孤立した労働等に対立する社会化された労働の生産力のこの発展、それとともに社会的発展の一般的所座である科学の直接的生産過程への応用、これらはすべて労働の生産力としてではなく、資本の生産力としてあらわれる。」「絶対的剰余価値の生産が資本のもとへの労働の形式的包摂の物質的表現とみなされるように、相対的剰余価値の生産は資本のもとへの労働の實質的包摂の表現とみなすことができる」『ドイチュ・イデオロギー』では分業即所有関係と把握され、分業の発展即所有関係の発展として把握せられたいたのに対して、生産力と生産関係、土台と上部構造という唯物史観は、『経済学批判序文』において完成し、論理の上ではもう、個人はすっかり姿を消し、階級が前面に出てくる。分業即所有関係としての近代社会、と把握した『ドイチュ・イデオロギー』、卑小にした表現をするなら分業の悪を機械—自動工場の発展による克服の可能性をみた『哲学の貧困』のマルクスは、完成した唯物史観によって、自己を清算しなければならぬ。強引ないい方がゆるされるなら、この作業は、資本のもとへの労働の形式的包摂および實質的包摂という把握によってなされたらみてよい。この作業が一旦なされたあかつきには、形式的包摂・實質的包摂よりもいっそう即物論的な概念であり、その物質的表現である絶対的剰余価値および相対的剰余価値の生産という観念だけで、十分事たりるのである。<sup>(1)</sup>

ともあれ、「形式的包摂の一般の特徴、すなわち技術学的にはそれがどんな様式でいともなまれていようとも、労働過程が資本に直接に従属する事実はかわりない。だがこれを基礎にして、技術学的な点およびその他の点で特殊な、労働過程の現実的性質とその現実的条件とを<sup>(2)</sup>変革する生産様式——資本主義的<sup>(3)</sup>生産様式があらわれる。」協業、分業

機械の発展は資本主義的生産様式の内容であり、そのもつプラスの側面たる生産力の発展もマイナスの側面も、すべてこれ資本のものである。かくして、協業、分業、機械それ自体がもつ非人間性・反人間性・疎外性は、資本の非人間性・反人間性・疎外性となり、技術的内容それ自体から生起する非人間性・反人間性・疎外性の一切は、資本ないし所有関係・階級関係から生ずる疎外として表現せられることになったのである。

(1) K. Marx, Kritik der Hegelschen Staatsrecht, 真下真一訳『ヘーゲル法哲学批判・付国法論批判その他』国民文庫版七三—九六頁。これまで、『ヘーゲル国法論批判』は翻譯も早くなかったし、あまり問題にされてきていない。城塚登『若きマルクスの思想』勁草書房でわずかにとりあげられている。David Mclellan, Marx before Marxism, 1970 西牟田久雄『マルクス主義以前のマルクス』頭草書房は全八章のうち一章をさしている。

(2) K. Marx, Zur Judenfrage, 1943. 花田圭介訳、河出版、とくに「二、ブルーノ・パウアー『現代のユグヤ人とキリスト教徒の自由なりうる能力』二六一—三二頁 この論文ほど、多くの問題をはらんでいるものはないように思える。ラビの輩出した家柄のユグヤ人マルクスが、このようなユグヤ教把握のみをしていたとは到底考えられない。この論文におけるマルクスの心の屈折は、ひかかく複雑なものがある。

(3) K. Marx, Debatten über Pressfreiheit und Publikation der Landständischen Verhandlungen, 1942. 4. 大月書店『マル・エン選集・補巻4』「自由はまことに人間の本質である。だから、その反対者でさえ自由の實在とたたかうことによつてみずから自由を実現するのである。すなわち、彼らが人間の本性の外飾として否認したところのものを、みずからもつとも高価な外飾としてわがものにしようとするのである。どんな人間も自由そのものと戦かいはしない。他人の自由とたたかうのがせきの山だ。だから、どんな種類の自由もつねに存在してきた。ただ、あるときは特殊な特権として存在し、またあるときは普遍的な権利として存在するだけだ。」三九頁 大月版・全集第一巻五四頁の訳を参照しながらすこしかえた。ほかにも引用したい箇所がたくさんある。

(4) K. Marx, Oekonomisch-Philosophische Manuskrifte, Zur Kritik der Nationalökonomie, mit einem Schlusskapitel über Hegelsche Philosophie, 1944. 4—8. 中野雄策訳 河出版。二〇三頁

産業における官僚制の成立

三八

- (5) Marx/Engels: Die Deutsche Ideologie, 1645—1946. 中野雄策訳河出版、二〇三頁—二六五頁
- (6) K. Marx, Misère de la Philosophie, repose a la Philosophie de la Misere de m. Proudhon, 1849 岡崎三郎訳河出版 四一〇—四二〇頁
- (7) K. Marx, Grundrisse der Kritik dar Politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1858, Anhang 1850-1859. 高木幸二郎監訳、大月書店 第二分冊二六二頁
- (8) 同上、第五分冊 一〇九七—一一〇九頁
- (9) 『マルクス・エンゲルス選集』大月書店、第九卷、下、五二九頁。
- (10) K. Marx, Resultate des unmittelbaren Produktion Prozesses. 『直接的生産過程の諸結果』草稿の書かれた年代は定かではない。『マル・エン選集』大月版、第十八巻の著作年表をみると(二三五頁) 一八六五年の項にのっているが、一八五三・七—五五年執筆と記録されている。だが本文での論述でもわかるように、一八六二年プランから資本論の出た一六七五年の間に書かれたものそれも早い時期六三年せいぜい六四年頃のものと思われる。『選集』九巻の解説は、一八六三年七月以降資本論第一巻出版までの間としている。なお、岡崎次郎訳大月国民文庫版(一九七〇年)の解説も参照されたい。
- (11) 『資本のもとえの労働の形式的包摂および実質的包摂』の概念に触発せられて、『経哲手稿』での疎外論を《形式的疎外および実質的疎外》なる概念によって展開してみようと試みたことがある。拙著『アメリカ経営思想批判』未来社、補章の二、

五

産業における官僚制の成立を、マルクスの『資本論』の「相対的剰余価値の生産」の論述をかりて述べ、同時に、産業における官僚制における疎外をマルクスは資本による疎外として把握していることを指摘した。

産業における官僚制組織が資本に包摂せられているかぎり、その疎外は資本の疎外と把握することは間違いない。だが、産業における官僚制、すなわち機械体系を基幹とした分業による協業は、それが資本制的なものであろう

とあるまいと、それ自体が疎外態であることを明確につかんでいないと、資本制生産が克服されさえすれば、産業における官僚制のもつ疎外性も同時に解消してしまうという幻想にとらわれることになる。

官僚制それ自体を抑圧の機構と把握していたマルクス、個人の自由から出発し、分業を疎外態ととらえ、分業の絶滅を願っていたマルクスが、階級中心の、したがってまた官僚制の疎外の責を一切資本のせいにしてしまい、階級の止場により官僚制の疎外の同時克服の展望をあたえるマルクスに次第に変化してゆくプロセスを、『ヘーゲル国法論批判』、『経哲手稿』、『ドイチュ・イデオロギー』、『哲学の貧困』、『経済学批判要綱』、『直接的生産過程の諸結果』によって迎ってみた。

唯物史観においては、生産力と生産関係、土台と上部構造という把らえ方をする。このとき、生産力は社会発展の原動力であり、もろもろの生産関係を段階的に発展せしめる原動力であり、資本制的生産関係をうちやぶって社会主義社会をつくり、やがては理想社会としての共産主義社会をつくりあげてゆく原動力である。生産力は、唯物史観においては聖化せられているのである。ここに、分業それ自体を疎外態と把握していたのに、生産力が聖化せられるとともに、生産力それ自体の中核物たる産業における官僚制の悪まで免罪に付されてしまい、一切は憎むべき生産関係の罪に帰せられてしまったのである。<sup>(1)</sup>

生産力の特定の発展段階に対する生産関係の総体が経済構造をかたちづくり、それを土台として政治的・法律的・意識的諸形態が上部構造として生れ、土台に働らきかけると把握すると、軍隊・官庁・教会・裁判所等の上部構造のそれぞれの官僚制はマルクスによって告発せられ、抑圧的性格のなくなった生産関係である社会主義社会において、抑圧的性格をそれ自体がもつ官僚制的上部構造があるという馬鹿げたことはありえない、という発言がでてくるので

ある。その時、マルクスは官僚制一般を告発しながら、特殊な産業官僚制を免罪に付した矛盾に気がついていないのである。

現代社会が到達した生産力を維持し発展させようと思えば、マルクス自身、労働生産性の向上の具体的な方法として、協業、分業、機械の発展をとらえたように、それは機械体系を基幹とした官僚制組織を維持・発展させる以外にない。産業における官僚制を維持、発展せしめながら、しかも官庁・軍隊・学校・病院・政党等々の官僚制を打破することは、果して可能なのであろうか。産業における官僚制の発展を一方において望みながら、他方において官僚制をなくすための官僚制をつくることを実現しようとしたレーニンは、その矛盾の深さ、大きさに全たく気がついていないようである。<sup>(2)</sup>

(1) 生産力の聖化については、シモーヌ・ヴェーユが最も痛烈にえぐっていると思う。「自由と社会的抑圧との原因についての考察」、(石川湧訳『抑圧と自由』創元新社)を参照されたい。

(2) 本稿は、戦後まもないころ(昭和二四・二五年)、副田満輝教授が発表された論文に、大きな学恩をうけている。初期マルクスが資本論のマルクスに到達するすじ道を、疎外論的観点から深くかつ簡明にあきらかにしたこの論文は、最近の初期マルクスないし疎外論の諸論文と比較して、依然として光芒を放っている。

「経済学批判の成立——批判原理の生成——」九大経済学研究、第十卷第一・二号所収「経済学批判の成立(二)——生産力の疎外——」九大経済学研究、第十六卷第二号所収

副田満輝先生にこの稿を捧げたい。